

Injury Alert (傷害速報)類似事例

医薬品(精神神経用剤)の誤飲による意識障害(No.67 医薬品の誤飲による中毒の類似事項4)

事例	年齢：1歳8か月 性別：男児 体重：12.2kg 身長：81.3cm	
傷害の種類	薬物誤飲	
原因対象物	精神神経用剤(オランザピン錠 10mg)	
臨床診断名	急性薬物中毒	
医療費	入院費 41,652 円、外来費 1,590 円	
発生状況	発生場所	自宅の居間
	周囲の人・状況	発生当日午前8時半頃、母親が外出。自宅には母方祖父母と父親、本児、2歳の姉が残った。母が不在の間、母方祖母や父親が本児を世話していたが、自宅でどのように過ごしていたかの詳細は不明で、本児が一人になる時間帯もあった。薬剤はPTP (press through pack) 包装であり、1錠ずつに分けられ、蓋のない容器内に保管されていた。容器は居間にある高さ90cmの出窓に置かれていたが、普段から簡単に本児の手が届く場所においてあったかなど詳細は不明であった。なお出窓の近くにソファなどはなかった。
	発生年月・時刻	2018年3月X日(土) 午後1時30分頃
	発生時の詳しい様子と経緯	発生当日午前11時半頃、父親が本児を抱き上げた際に一時的に振戦様の動きが見られたがすぐに消失したため経過観察していた。午後1時、母親が帰宅した。午後1時30分頃、本児がソファから転落したことを、2歳同胞が母親に申告した。転落そのものを目撃した大人はいなかった。本児は居間の床上に仰臥位で眠っている状態であった。本児の周囲に母親の内服薬であるオランザピンの空包が9錠分散らばっていた。1錠は同室の床上で発見できたが、残り8錠は行方不明であった。午後1時50分より上肢振戦が継続し、医療機関Aまで救急搬送された。医療機関Aでは意識障害および振戦からけいれん重積発作と考えられ、医療機関Bへ救急搬送となった。医療機関A、医療機関Bへ到着した詳細時刻は不明である。

治療経過と予後	<p>医療機関 B に搬入時、顔面紅潮、四肢振戦、GCS (Glasgow Coma Scale) E3V3M4 の意識障害を認めた。バイタルサインは、体温 37.9 度、血圧 100/60mmHg、脈拍数 140/分、呼吸数 48/分、SpO₂ 98%(大気下)であった。瞳孔は 2mm/2mm、対光反射は左右差なく迅速であった。急性薬物中毒を鑑別診断の第一に挙げ、活性炭吸着療法を実施した。中枢神経感染症も考慮して血液検査、尿検査、髄液検査を含む各種培養を採取し、初療の中で抗菌薬治療も開始した。意識障害が遷延したため精査加療目的に一般病棟へ入院とした。入院時の血液検査、尿検査、頭部 CT 検査、頭部 MRI 検査、薬物中毒検出用キット、髄液検査では、明らかな異常所見を認めなかった。各種培養が陰性であることを確認し、入院 3 日目に抗菌薬を中止した。入院後より意識レベルは徐々に改善し、入院 5 日目(薬物を誤飲したと思われる時刻から約 96 時間後)に意識清明となった。</p> <p>誤飲の目撃者はおらず、2 歳の同胞が 9 錠分包剤を開封し、1 歳 8 か月である本児が約 1cm 大の錠剤 8 錠を自発的に内服したと推測された。一方で虐待も否定的できないことから、院内虐待委員会および児童相談所にて審議を行なった上で、入院 13 日目に退院した。退院後、入院時の血液・尿・髄液検体より高濃度のオランザピンが検出され、急性オランザピン中毒の確定診断となった。退院後、本児の成長発達の観察および養育環境の支援のために外来管理とした。外来経過に特に問題なく、2020 年 1 月に終診した。</p>
---------	---